

海産アユ種苗回帰率向上総合検討調査*

抄 録

武 田 保 幸

アユは内水面漁業において重要な魚種であり、その資源を維持・培養するには再生産に結びつく海産アユ種苗の回帰率向上を図ることが必要となってきた。そこで、その手法を検討するため、日高川ならびにその周辺海域においてアユの生息実態等について調査を行った。

当事業の内容については既に「海産アユ回帰率向上総合検討調査委託事業報告書」として印刷・公表されており、また、その内の和歌山県内水面漁業センター担当分については当センター事業年度報告書に詳述されているので、ここでは和歌山県水産試験場担当分の結果概要について述べる。

調査は(1)アユの沿岸域での生息実態および環境、(2)シラス対象漁業によるアユの混獲、について行われた。(1)については、漁業調査船「わかやま」の運航により、月例の海洋観測とリンクさせて1993年10月～1994年2月に月1回、日高川河口域の6定点で稚魚ネットによってアユ仔魚の採集を行った。また、(2)については1993年10月～1994年2月に紀伊水道和歌山県側の7漁協(北から西脇、美浜町、御坊市、南部町、田辺)において、船曳網および地曳網漁獲物のシラスを1回につき約100g採集・固定した後、漁獲別の混獲率と全長・体重を測定した。混獲率は湿重量を用いた。

稚魚ネットでアユ仔魚が採集されたのは、11月(11日)のみであった。前年度の結果と同様に河口に近い定点で多かった。仔魚の全長範囲は5～9mmで、そのモードは5mmであり、遊泳力のない浮遊仔魚がほとんどであった。前年度調査では12月に9個体が採集されたが、今年度は12月に全く採集されなかった。

シラス対象漁業によるアユ仔魚の混獲は、前年度調査では湯浅湾と有田市沿岸でみられてのみであったが、今年度はほぼ全域で混獲がみられ混獲率も高かった。特に日高川河口域の御坊市北塩屋(地曳網)で多く混獲された。当地では12月下旬に最も混獲率が高かった。混獲された仔魚の全長は50mm以下で、20～40mmに分布の中心がみられた。

*海産アユ回帰率向上総合検討調査事業費による。